

特集にあたって

札幌麻生脳神経外科病院 飛驒一利

脊髄血管障害は、本誌においても何度か取り上げられていますが、日々の臨床では比較的頻度が少なく、診断・治療が可能な施設が限られているのが実態です。近年、MDCTAの進歩、術中のモニタリング、術中DSA、ICGなどを駆使したハイブリッド手術室、さらに血管内手術の進歩により、病態の解明、より低侵襲な治療が可能となっていますが、今回、それぞれのエキスパートに現時点での診断と治療の限界について解説していただくこととしました。

脊髄血管障害の中では脊髄動静脈奇形が代表的な疾患であり、本誌でも多くの著者に解説していただきましたが、分類については、いまだ統一的な見解はないのが実情です。

長内俊也先生には、脊髄動静脈奇形の歴史、古典的分類から、遺伝的分類を含む最新の分類についてまで詳細に述べていただきました。

高井敬介先生には、脊髄動静脈奇形の病態について、うっ血性脊髄症、髄内出血、急性血栓化、圧迫性病変と具体的症例を提示し、述べていただきました。

山口智先生には、最も頻度の多い脊髄硬膜動静脈瘻の外科治療の治療原理、術前の検査、準備、発生部位別の外科治療の要点、さらに合併症、再発などについて詳細に述べていただきましたが、非常に実践的な内容といえます。

高見俊宏先生には、脊髄辺縁部動静脈瘻を担当していただきましたが、学会でも常にきれいなビデオを提示する高見先生らしく、ICG、モニタリングを駆使した手術手技のポイントについて、詳細に述べていただきました。

新見康成先生は、長年ニューヨークでDr. Berensteinと一緒に仕事をされていた先生ですが、脊髄動静脈短絡の血管治療についてはNo.1と私が思っている先生です。血管内治療の基本、診断、撮影、カテーテル、塞栓物質、さらに多種多様な疾患について述べていただきました。

遠藤俊毅先生には、髄内動静脈奇形の定位放射線治療について述べていただきました。髄内動静脈奇形は、外科治療はもちろん血管内治療でも、主たる流入血管が前脊髄動脈であることから治療が難しく、今後も定位放射線治療、将来的には陽子線治療などを駆使することが多いと思われます。

竹島靖浩先生には、bow hunter 病の診断と治療について、同疾患の概念と治療のアルゴリズム、さまざまな治療について説明していただきました。

野地雅人先生には、日常診療でときどき遭遇する脊髄硬膜外血腫について、その臨床像と画像所見、治療、鑑別診断を詳細に述べていただきました。

以上、脊髄血管障害について、最新の知見を交えながら、実践的な内容であり、読者の皆さんにとって有益な情報になることと思われます。